

# 古麻呂もビツクリ！

下野市教育委員会 文化財課

下野市では、AR（拡張現実：アグメンティッド・リアリティ）・VR（バーチャルリアリティ）を活用し、『VR東の飛鳥』一甍る下野薬師寺一アプリケーションを制作しました。このアプリにはマップガイド、観光ガイド、バーチャル映像、すぐろくスタンプリー等の機能が盛り込まれています。

特にバーチャル映像については、国指定史跡下野薬師寺跡の建物復元等を高精細CGによりおこない、スマートフォンやタブレット等により史跡地内の五か所でVRのパノラマ画像を見ることが出来ます。また、復元CG画像等を用いた下野薬師寺を紹介するための映像も制作しました。

下野薬師寺は西暦六八〇年頃、中央で活躍し大宝律令の選定にもかかわらず下毛野朝臣古麻呂が建立に関与したと考えられています。下毛野一族が治めていたのは、現在の下野市を含む河内郡周辺と考えられています。下野薬師寺はその後、東国の仏教文化の中心的施設として、氏寺から国営の国立寺院となり、それに伴い大改修が行われました。この工事の際には、平城京の寺院や宮殿の建設を指揮した工人の棟梁と考えられる於伊美吉子首（本籍：平城京右京三条三坊）が「下野国薬師寺造司工」として

赴任しています。彼は、当時七九歳で、従六位上の位階をもっていました。木工、石工、左官、瓦職人、金属加工、仏像製作、絵師などの様々な職人を連れ、総指揮権をもった「大工」であったと考えられます。現代に置き換えれば大手建設企業体の現地総責任者のような立場であったと考えられます。また、各部署で相当数の人員が働いていたと考えられます。現代の工事と違いすべては手作業で、人海戦術による作業でした。礎石となる一トン以上もある石材は、鹿沼市深岩地区か宇都宮市大谷地区から、各建物の柱となる材木も那須・足尾・日光、八溝などの山塊から運んだと考えられます。長さ十五センチメートルで数千本以上の鉄釘の原料となる砂鉄も黒川や思川、藤岡地区南部の渡良瀬遊水地付近で採集され、製鉄が行われたと考えられます。瓦は宇都宮市の梶原北側の水道山の登り窯で作られ、成人男性が十枚（約六十キログラム）程度を薬師寺まで背負って来ました。

西暦七六一年には、東大寺（奈良）、筑紫観世音寺（福岡県）と下野薬師寺に日本三戒壇と呼称される戒壇が設置され、東日本（上野国・現在の群馬県・武蔵国・現在の埼玉県・東京都・相模国・現在の神奈川県以東）

で僧になるための優秀な人材が集まりました。このような古代東国随一の仏教文化の中心的施設であった下野薬師寺も律令体制の機構改革や中世以降の戦乱によりすべてが失われ、現在は回廊の一部が復元されていますが、かつての威容をうかがい知ることはできません。

そのため、この荘厳であったと想定される最盛期の下野薬師寺の建物など、往時の姿を体感できるように伽藍全体をCGで復元しました。復元した建物群は平安時代、塔が再建された頃をイメージしています。

このような古代寺院の全容、伽藍配置をすべて復元する試みは、あまり例がなく、今後、文化財等の活用促進と観光資源化を進める上で有効なものとなります。

一年間からずい、すべての建物が建ってしまうCGを見たら、古麻呂や当時の工人達、監督をした於伊美吉子首はどんな感想を持つでしょうか？また、想像で復元した建物の精度について、どんな評価をもらえるか、見てもらいたいような仕上がりとなりました。